

世界の中心で剣は世界一可愛いと叫ぶ～そんな俺は剣のお世話係～

イチゴ侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

”風鳴翼のお世話係募集中”

海外でのアーティスト活動が主になってきた風鳴翼のマナージャーである緒川慎次。彼の毎日は多忙の連続。そこで募集が始まったそれは、身内を超え、ネットの海に流された。遊び半分、下心満載、そんな一般の応募者を払い除け、ついにやってきたのは男――

――高波隼斗（たかなみはやと）。そして――、

「お給料いりません。そして関係を持ちたいとも思いません。下心とかも微塵もありません。ただお世話したいんです。もちろん信用出来ないと言うのならば、”去勢”しても構いません！なので！ 風鳴翼さんのお世話をさせてくださいッ！」

お世話が出来るのならば自分のアレをこの場で去勢してもいい！風鳴翼のファンだと言い張るそのHENTAIを前に、緒川は合格を出すのか？そしてそれにお世話される風鳴翼の運命とは如何に！

※これが私の全力全開、ネタ作品です。時系列的には風鳴翼さんがJKでは無くなってしまった辺りです。

目次

面接	1
実践テスト①	10
合格！からの修行なの？	19
修行と新たなる旅路	27
防人は男を知り、可愛くなる	35

面接

『風鳴翼の世話係の面接受けたったwwww』

それは突如ネットの海に流れてきた話だった。

風鳴翼と言えば日本が誇るあの大人気アーティスト、歌声はもちろんの事、スタイル良し、人柄良しの男女問わず憧れる女性だ。

未だ20代入ったばかりほどの彼女だが、若者受けの歌だけでなく演歌も歌えるほどのバリエーションで老若男女知らぬ者無しだ。

そんな風鳴翼のお世話係とはなんなのか、PCの画面に映るその眩きをマジマジと見つめる男は、マウスを動かす。

『それマ？ k w s k』

『なんか極秘？ だかなんだかで風鳴翼のマネージャーが募集かけてたみたいで人数は1人だけらしいぞ』

『極秘なのにバレてるの草』

『いや実は俺関係者だしw』

『関係者がお漏らしw』

『これどうやったら応募できるのよ』

『←にURL貼っとくわ』

『これは有能』

『関係者ナイス』

『てか関係者さんが受かってたらもう終わりじゃね？』

『それな』

『あれ？ バレた？ w』

『クソ野郎過ぎて笑えねえ……』

『上げて落とすな』

それからこの関係者と何十万と及ぶ人達のやり取りが続き、後から嘘でしたなどとは言えない状況となる。

しかしこのやり取りは唐突に終わりを迎えた。

『あれから誰か応募した?』

『関係者が落ちたら応募する』

『→に同じく』

『てか関係者さん最近呟いてなくね?』

『それな』

『まさか受かってウハウハで忘れてるとか?』

『はー羨ま。あの風鳴翼のお世話とか』

『てか風鳴翼のお世話って何するのよ。前にテレビで部屋見たけどめっちゃ綺麗だったじゃん』

『実は汚部屋とか? w』

『それはありそう』

『仮部屋だったのか……』

『それは萎える』

『ギャップ萌えしそう』

『それな』

『てかほんとに関係者さん来ねえな』

それから数日間、関係者は一度も呟くことなく、関係者のアカウントは削除された。それを人々は応募終了のお知らせだ、社会的に抹殺されたんだと言うふうにつまえていた。

が、一部それらとは真逆の考え——関係者が面接で落ちたのは? と捉える者が現れた。それを好機と捉えた者たちはこぞってあの募集のURLから風鳴翼のお世話係の募集に応募し始めた。

それから落ちただの、返事待ちだのと会話が飛び交うこととなった。しかし”受かった”という文字は全く現れない。

それは単純に受かっても言えないルールがあるのかもしれないが、募集が終わってない事を見るにそれはありえない。

こうしてお世話係の募集は実在していた事がネットの海で知れ渡ることとなった。

「………完成した」

部屋に一人、机に面と向き合い一枚の紙を掲げる一人の男が居た。
「合格報告は……無し、よしっ」

男は手に持った一枚の紙を透明なクリアファイルに慎重に収め、黒いビジネスバッグに入れるとスーツに着替え始める。

水色のネクタイをしっかりと閉め、両頬をバチツと叩き気合を入れた。

「よし、行くぞ……！」

部屋を抜け、玄関を出る男。その足が向かう場所はただ一つ――



その日、今日も今日とて緒川慎次は頭を抱えていた。

「これで524人目……ですか」

それは、風鳴翼のお世話係の応募者数であり、緒川が面接をしてきた人数でもある。

そして緒川こそが、風鳴翼のマネージャーでありこの募集を始めた発起人だ。

当初では自分が知りうる人限りでの募集に収めるつもりだったこの募集。しかし、その中の一人によってネットの海に流されてしまい、一般からも募集が来るようになってしまったのだ。

ちなみに流した人物は、既に社会的に抹殺されている。

即座に募集を切ることも考えたが、知人の中では合格者が現れることが無かった。そこで不承不承ながらも一般からの募集も続けることに決めた緒川だった。

「緒川、やはり面接を越えられる者は現れないか？」

「司令……」

「ま、無理もないか。これまで翼を支え続けたお前が面接するんだか

らな」

司令と呼ばれたOTONA——風鳴弦十郎は、近くに置かれていた履歴書に目を通す。

「さっきの奴なんか良かったんじゃないか？　資格や志望動機なんかも問題なしだろ」

「いえ、彼は……上辺だけでしたね。翼さんのことについて少し喋るとそれが容易に浮かんできましたから」

「なるほどな」

畏にかかった、という事だろう。一般から募集をかけるとはすなわち、風鳴翼のファンがやって来るのは明白だ。自分の憧れの人、好きな人に近づけるチャンスが転がっているのだ、それを無視できるほど人間は簡単ではない。

「しかしあれですね。皆さん誰もが翼さんのファンですとはハッキリと言わないですよね」

「それはあれだろ。ファンだからなんて言っちゃまえば警戒されるのがオチだ」

ファンの中にはそれはソフトな気持ちで推している者もいるだろう。しかし中にはかなり危険な分類に入るようなファンもいる。本人を近づかせれば暴走するような輩や、下心満載な輩、数えればキリがない。

「だからこそ”ファン”という肩書きは非常に警戒されてマイナス評価に繋がる可能性があるのだ。」

「僕としてはファンだと言ってくれる方が嬉しいんですけどね」

「なるほど、つまりは——リスクを承知で名乗れる奴くらいじゃないきゃまず無理って事だな」

「はい……おっと、そろそろ次の方ですね」

「お、なら今回は俺も同伴させてもらうかな」

次の方、ご愁傷さまで……と心の中で合掌する緒川。世の中には

圧迫面接という言葉があるが、弦十郎に至ってはただの一人で圧迫面接を凌駕する圧迫面接となるだろう。

一言も口にせずとも存在感だけで圧倒するそれがたまたま偶然にも自分の番に居座るとは、もうすぐやってくる方には想像もつかないだろう。

そして面接室のドアがノックされた。

「はい、どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのは、緒川と同じくらいかそれ以下の身長のある男だった。髪は染めることなく真っ黒で、肌が白くアウトドア派には全く見えなない。顔は可もなく不可もなくという感じで、可愛い寄りのかっこいいといった印象を受けた。

服装は自由に私服でもOKと募集には書いていたが、スーツでやってきたのは彼を含めて数人ほどだっただろうか。緒川の中では第一印象は良好だ。

「どうぞ、座ってください」

「はい」

緒川に向かって一礼する男、そればかりか隣にいた弦十郎にも男は礼をする。

「では、まず自己紹介をお願いします」

「高波隼斗です。現在はフリーターで、就職活動中です。趣味は料理と掃除……あと、風鳴翼さんの歌を聴くことですね」

その時、緒川の目が光る様を弦十郎は見逃さなかった。

「本日はお忙しい中、お時間頂きありがとうございます。どうぞよろしくお願ひいたします」

「はい、よろしくお願ひします。僕が風鳴翼のマネージャーを努めさせて貰っている緒川慎次です。そしてこちらが……」

「風鳴弦十郎だ。苗字の通りだが、俺は翼の叔父に当たる者だ。よろ

しく頼む」

弦十郎の礼と共に礼を返す隼斗。内心、隼斗はその威圧感に圧倒されかけるが何とか踏みとどまっていた。それを微塵も表に出さないそのメンタルに、緒川は密かに賞賛していた。

「では高波さん。あなたは現在、就職活動中のようですが、どのようなお仕事に就きたいと思っていましたか？」

「家政婦になりたいと思っていました。物心つく時には既に料理や家の掃除など、母がやっている事には興味を持っていました」

「なるほど、それで料理と掃除が趣味ですか。腕の方はどうなんですか？」

「かなり良いと家族や友人にもよく言われます」

口頭で伝えるのは簡単だが、この答えをはつきりと言えろ言えないでは、この面接の次に行われる実践テストで大きく関わってくるため重要なのだ。

「他には風鳴翼の歌を聴くこと……と言いましたが――」

「ファンです」

「……」

「ほう……」

それはこれまで524人を相手にしてきた緒川の中で初めて聞いた言葉だった。誰も彼もが禁句とばかりに口にしてこなかった“ファン”という三文字。

緒川はその瞳を鋭く構え、弦十郎は関心の声を漏らす。一瞬にして空気の変わった面接室、だが隼斗は臆することなく次の問いかけをただ待つ。

「では、翼さんの歌で好きな歌を挙げるとするならどれでしょうか？」

”FLIGHT FEATHERS”です」

それはかつて、アーティストユニット”ツヴァイウイング”として片翼の天羽奏と共に歌っていた翼がその片翼を失い、活動復活後に一

人ステージに立って歌った曲だった。

「僕が風鳴翼さんを知ったのはそのライブが初めてでした。そこで初めて聴いたあの歌はどこか悲しく、そして強い想いを感じました。きつとそれはツヴァイウィングとして活動していた頃に共に居た天羽奏さんを思っていたのだと解釈してます。それ以来風鳴翼さんのファンで他にも上げればキリがないほど好きです」

「なるほど……」

緒川は強く頷き、弦十郎はただ静かに噛み締めていた。

「では、高波さん。志望動機を教えてください」

「風鳴翼さんのお世話がしたい。それだけです」

真つ直ぐに一直線に目を向ける隼斗。その目はしつかりと緒川を捕らえて離さなかった。しかしその呆気なさに緒川は肩透かしをくらっていた。

「そ、それだけですか？」

「はい」

緒川はそつとこれまでの志望動機を思い出す。524人全員が同じような長い動機をペラペラと話していた。

しかし、今日の前にいる男はたった数文字だけしか口にしなかった。どんなに聞き返しても”それだけ”だと頑なに変える気はないらしい。

「そ、それだけ……えっと、もつと他に……そう、熱い思いとか……」

「緒川？」

それは長い付き合いの弦十郎ですら見たことがないような緒川の姿だった。どんな予想外にも冷静に対応していた緒川が今、慌てているのが目に見えて分かる。

おそらく524人もの相手をこれまでできて、初めてのタイプに出会ったからこそその動揺なのだろう。

「熱い思い……。では、志望動機と言うには少し違うかもしれませんが、決意表明と捉えてください」

「は、はい、それでお願ひします」

「ではこの際だから言います——まず、お給料いりません。そして関係を持ちたいとも思いません。下心とかも微塵もありません。ただお世話したいんです。もちろん信用出来ないと言うのならば、去勢しても構いません！　なので！　風鳴翼さんのお世話をさせてくださいッ！」

高らかに決意表明した隼斗。その数秒後、弦十郎は笑いだし、緒川は目を閉じた。

そして隼斗は去勢しかけた（未遂）

◇

数日後。

「……というわけで、525人目の応募者である高波隼斗さんが第一面接突破となりました」

「すいません緒川さん。何が”というわけ”なのか全くもって分かりません」

「525人目ですよ。翼さんのお誕生日と同じ数字ですね！　当たりですよ！」

「お、緒川さん……？」

「翼。そっとしてやれ」

いつもと明らかに様子のおかしいマネージャーを心配する翼。事のあらましに関しては弦十郎を通して伝えられた翼だが、ある部分で引っかかった。

「きよ……きよせ——っ!？」

「まさかその場で切り落とそうとするとは思わなかったな」

「そ、その——ば!?!」

顔をこれでもかと真っ赤に染める風鳴翼19歳。立派に大人の分類だが、まだまだそっちの知識に関してはウブである。

「だ、大丈夫なんでしょうか……その人は」

「ああ。ある意味、俺が知る中で一番のファンだろうな。なんせきよせ——」

「——も、もういいですっ!」

そして翼は全身真っ赤になりながらもその場を後にした。

「ぜ、絶対まともな人じゃないよ……奏……」

今は亡き片翼に助けを乞う風鳴翼19歳だった。

実践テスト①

隼斗が”風鳴翼のお世話係”に応募してから数日後、無事に面接を通過した事が伝えられ、次は実践テストの案内がやってきた。

「筆記試験とかはよく聞くけど、実践って何をやるんだろ」

隼斗は自室で掃除機をかけながら考える。普通に考えればこれはお世話係の募集なため、予想できることと言えば料理、そして住まいの掃除、衣服の洗濯だろうか。

さらに視野を広げれば仕事のサポートだったり、身体のケアも入るだろう。

身体のケアと聞けば誰しもがキャツキヤウフフなのを想像するが、去勢した男（未遂）である隼斗の場合は微塵も浮かぶことは無く、エステや整骨院などのマッサージを想定していた。

「その辺も視野に入れて今のうちに鍛えるか？」

そしてその翌日、隼斗の母はピッチピチの肌と体の柔らかさを手に入れたとか。



そして、実践テスト本番の日。

約束の場所に着いた隼斗。集合場所は予想外にも都心の高級ホテルだった。かなりの高さで普通の一般人なら5年かけてやっとな程の額を要求されるホテルで、設備も最高級、ネット評価など付けられる代物ではないほどのモンスターホテルだ。

想像以上の場違い感に居心地が悪くなる隼斗。ホテル内に入り、入口付近のフカフカのソファに腰掛ける。

「……や、やわらか過ぎる」

使い古されたソファなど足元にも及ばないその弾力性。今座った

ばかりにも関わらず即座に隼斗の腰にフィットするよう形を変える対応力。

表面には糸くず一つあらず、封を開けられたばかりではという程の新品さ。

隼斗は軽くショックを受けた。

「今の俺じゃこれほどまでにソファを保たせる技術はない……まだまだだな」

しかし、隼斗は知らない。

たまたま座ったそのソファがまさかの本当について先程封を切られ、置かれたものだったという事を。

密かにそのソファの着席第一号となった隼斗だった。

「高波さん。お待たせしました」

「あ、緒川さん。本日はよろしくお願いいたします」

「こちらこそ。では、案内します」

実践テストの詳細は結局のところ今日まで何一つ教えられていない。何が 필요한のか、何が待っているのか、検討も付かない隼斗は言われるがままに緒川の後を歩いていき、たどり着いたのは、VIPルームだった。

「ここって……あの有名人とかじゃないと入って来れないって言う最高級の……」

「よくご存知ですね。あつ、確か以前にテレビの取材が入っていましたね」

「はい！ その放送は俺も見ていて……あつ、俺じゃ無くて……すいませんでした」

「ああ、大丈夫ですよ！ 高波さんの人となりは面接で終えているのであとは実力のみです。普段通りの話し方で構いませんよ」

「……」

隼斗は軽く息を飲む。長い廊下を歩き、ようやくたどり着いた一

室。その前に立たされ、インターホンを鳴らした。

「はい！ 今開けます！ 緒川さんですか——」
中から聞こえてきたのは、紛れもなく隼斗の憧れでもあり毎日のように聴いている女性の声そのものだった。

徐々に近づいてくるその足音に胸躍らせ、隼斗はジツと待つ。
そしてドアが開き中から現れた人物と隼斗の視線が交差する。

「あつ……」

「へっ……っ？」

現れたのはあの大有名な——風鳴翼。そしてその翼の前に現れたのは見知らぬ男性——高波隼斗。
そして傍でその一瞬を見ていた緒川は、

「翼さんには言ってますませんでしたね。彼が面接を通った高波隼斗さんで、今日が実践テストの日でした」

ニツコリ顔で事故報告を済ませる緒川。その動じない姿勢に隼斗とは呆れ、翼はプルプルと震えていた。

「緒川さんッ！」

「まあまあ翼さん。サプライズですよ」

「マネージャーともあろう人がスケジュールを事前に伝えないなんて……」

「あはは……っつい」

「最近の緒川さんはたるみ過ぎですよ？」

「——あ、あの……」

二人のあれやこれやと始まる会話に着いていけず、ハブられていた隼斗が口を挟む。

ようやく気がついた翼と、申し訳なさそうに首の後ろに手を当て苦笑する緒川。

「翼さん、いつまでもこんな所で話す訳にもいかないのです。そろそろ入れてもらってもいいですか？」

「い、入れる……とは？」

「文字通り高波さんと僕をです」

「ど、どこに……？」

無言で指を指す緒川。その指先は翼の部屋を指していた。

これであろうやく話が進む、そう安堵しかけた隼斗だったが、それは虚しく崩れることとなった。

「それは……その、少し！　ほんの少し待っていてください！」

「え？」

隼斗にそう言う翼は、すぐさま開けたドアを閉じようと動く。呆気にとられる隼斗の前に、颯爽と動く黒が見えた。

バンツ、と音が鳴った。

「お、緒川さん……！」

「翼さん、ダメじゃないですか。閉めてしまったら入れないですよ？」

「ヒエツ……」

何かに怯える翼。その視線が捕らえたのは、満面の笑みを浮かべた魔王だった。

しかし、何に怯えているのか隼斗の位置からでは全くもって見当もつかなかった。

閉められかけたドアがミシミシと音を鳴らし、それはまるで二人の罅迫り合いに挟まれてしまったドアの助けを求める声にも聞こえた。

「緒川……さん、離してください……！」

「翼さんこそ、そろそろ諦めてください」

「くっ……！」

「……っ」

一体何を見せられているのか、隼斗は思う。まず自分は今日ここに

何をしに来たのか、それすらもあやふやになってきてしまっていた。

「ちよ……一人ともそろそろ……」

「すいません高波さん、今止めますね!」

そう言うとき緒川は、おもむろに胸元からギラッと刃先が光る短刀を取り出した。

「あの!? 俺が言ってるのはそういうそろそろじゃなくて!」

「行きます!」

隼斗が止めようと動くが、間に合わない。緒川の抜いた短刀は、その先を地面に向け投げられた。翼の足が危ない、その後待っている惨劇を隼斗は想像し目を瞑る。

そして翼の悲鳴が聞こえ――、

「……お、緒川……さん」

「少しばかり大人しくしてください」

《影縫い》

それはNINJAなら誰しもが扱えるという忍術の一つ。文字通り対象の影を地面に縫い付けて、その動きを確実に止める技だ。それを扱えるのもNINJAであり、解けるのもNINJAだけだ（一部例外を除く）

体の自由を奪われた翼は、ドアを閉める体制のまま固まりその手に入る力もまるで入らない。

「さ、高波さん。試験会場はこちらです」

まるで何も無かったかのように振る舞う緒川の姿勢に少々の恐怖を感じた隼斗。緒川に着いていくように足を進める隼斗だったが、横切る際の翼の悲痛な表情に少しばかり心痛める。

それほどまでに人をあげたくないのかと、隼斗は疑問に思う。

――が、その疑問はすぐさま解決されることとなった。

「これは……フィクションですか？」

「いえ、ノンフィクションです」

それはホテルの部屋と呼ぶにはあまりにも汚く、おぞましかった。これほどまでの惨状は隼斗の記憶上、中学時代に経験した修学旅行の男子部屋が最後だった。それがこのような形で塗り潰されるとは思いもしないだろう。

脱ぎ捨てられた服やスカート、一足ポツンと捨て置かれた靴下。常人の男ならば鼻の下を伸ばしに伸ばすであろう下着の類。

そしてそれだけかと思いきや、どこで買ったか大量の空のペットボトルゴミ。さらには食べ終わった後であろう弁当のゴミ！ゴミ！そしてゴミ！数えればキリがないほどだった。

「緒川さん……これはあれですよ？ 俺の実践テストのために用意されたんですよ？ そうですよ？」

「いえ、正真正銘……風鳴翼の生活風景そのものです」

玄関の方から悲鳴が聞こえる。隼斗は聞こえない振りをしながらも心の中で愁傷さまと合掌した。

これまで出会ってきたことがないレベルの汚部屋でかつ、足場すら確保するのも難しいこの現状の中、隼斗は体の震えが止まらないでいた。

「高波さん？」

「緒川さん、理由はともあれ実践テストっていうのはつまりこの部屋を綺麗にできるか……ってことですね」

「その通りです。さらに言うとな翼さんの衣服類を綺麗に収納する事も入ります」

緒川は床に無造作に置かれていたキャリーバッグを指さす。かなりの大きさではあるが、明らかに散乱した衣服の数と大きさが比例していないようにも隼斗は思えた。

「でも本当に良いんですか？ 翼さんは女性な訳ですし、下着とか俺

が触れても嫌じゃないんでしようか？」

「そうですね、どうでしょうか？ 翼さん」

同タイミングで先より身動きが取れずにいた翼がようやく動き出し、言いたい事がたくさんあると言わんばかりの複雑な表情を浮かべていた。

「……はあ、はあ……」

「だ、大丈夫ですか？」

「いえ、ありがとうございます」

緒川と隼斗が話している間、翼は常に緒川にかけられた影縫いを解除するために必死に頑張っていたが、その影響かもう既にどこかやつれていた。

そしてようやく話は進むこととなる。

翼の下着の件については、片付けられなかった翼の落ち度ということとで不承不承ながらも隼斗が触れることを了承する形となった。

緒川としても隼斗がそれでナニかをするかもという警戒は、面接の時点で無いに等しいと理解しているため何も言うことは無かった。

「では、制限時間60分。開始してください！」



ゴミが一つ、ゴミが二つ、ゴミが三つ……。

まず隼斗が手をつけたのは、すぐに片付けられる散乱したゴミの収集だった。

瞬時にゴミ袋を三つ用意し、分別していく。

「器用なものですね」

「慣れてますから」

その場には椅子にちよこんと座る翼の姿があった。

翼の同席に関しては隼斗たってのお願いだった。当初は緒川共々

部屋を後をにする予定だったが、面接で相対した緒川と違い、翼とは今日が初顔合わせである。そんな中で自分の私物が見ぬ間に漁られるのは良くは思えないだろうと察した隼斗が翼に監視役としていてもらうことにしたのだ。

「今日も仕事とかあるんですか？」

「あ、いえ。仕事自体は昨日で終わっていたので今日はお休みでした」

「それは申し訳ないことしましたね……」

「え？」

「せっかくの休みだし、翼さんのご自宅はここ付近じゃないんですよね？ 観光とかしたかったですよ」

自分が片付けている間の時間で羽を伸ばせたであろう事を知り、監視役などと縛ってしまったことを後悔する隼斗。

それを感じ取った翼はすかさず否定した。

「いえそんな！ むしろ人に掃除を頼んで私だけ楽しむなど出来ません……」

「優しいですね。翼さん」

「……っ」

不意に投げかけられた言葉に数秒動揺する翼。歳の近い男性が周りにあまりいないため、そのような事を言われるのは慣れていなかった。

「た、高波さんは……その、どうしてこんな事やろうって思ったんですか？」

「翼さんのお世話係ですか？ 面接の時にも言ったんですが、ただ単純にお世話がしたい。それだけなんですよ」

「それだけ……」

気付けば大量にあったゴミは全て袋に閉じ込められていた。

汚部屋に滑車をかけていたゴミが消えるだけで印象がガラリと変わったのを隼斗はもちろんの事、翼も実感していた。

「凄い……」

「俺、家政夫になりたかったんですよ」

「家政夫というと家事代行のですね」

「はい。世の中には片付けたくても自分ではどうすることも出来ない、そんな人がたくさんいますよね」

翼は大きく頷いた。

「他にも仕事が大変でそっちに手が回らなかつたりとか、そんな人達のために何かをしたい。そう思って家政夫になりたいって思ったんです。そしてそんな夢への第一歩に大好きな風鳴翼さんが相手なんてほんとと死んでもいいレベルですよ」

「そんな大袈裟なこと……」

「大袈裟でもなんでもありません。ほんとに大好きですから」

下心のまるで無い隼斗の一途な物言いに、翼は恥ずかしくなり下を向かざるおえなくなった。

甘酸っぱい、それとは無縁だった翼にとってはこの空気がとても居心地が良く感じられた。

——青春ですね。

黒スーツのNINJAは後にそう呟いたとか。

合格！からの修行なの？

「あの、翼さん……これは」

「あつーそれは——」

隼斗の実践テストはまだまだ続いていた。当初は滞りなく進んでいた掃除だが、ある物によってその手が止まることとなった。

それは勿論——風鳴翼のブラジャーとショーツだった。

青色の大人物の下着で、無地ならまだしもかなりのセクシー路線で隼斗は反応に困っていた。

「えと……それは……下着の宣伝CMを撮影した際に頂いたものであつて決して私では……」

「なるほど、貰い物でしたか」

「は、はい……ですから……」

翼が大人ぶって無理して背伸びしていると思われたくないのだと考えた隼斗は、安心させるように話す。

「心配しなくても大丈夫ですよ。翼さんに良く似合ってると思います……って、これじゃあセクハラですね」

などとおちゃらけて話を逸らそうとする隼斗。その姿勢……ではなく、”似合ってる”と言われたそのことに少しばかり翼の肩が跳ねた。

「や、やはり下着は私がやります！」

一度も履いていないとはいえ、一度下着で一悶着あったということで恥ずかしさが勝り、翼は率先して下着だけをかき集めて畳み始めた。

しかし、その畳み方を見た隼斗は物言わざるおえなかった。

「翼さん、翼さん、その畳み方だと下着がかさばって他の物がケースに入らなくなりますよ」

「えっ？」

「翼さんがせっつかく協力してくれたのにすいません。少し貸してください」

翼が畳み掛けていたシューズを手に取り、隼斗は翼に見えやすいようにゆっくりと畳み始めた。

「まずはこうして縦に三つ折りにして……」

「は、はいー」

同じくシューズを手に取り、隼斗の見様見真似で手を動かしていく翼。その様はまるで、親に教えを乞う子どものようだ。

「それでここで折って……」

「……こう、ですか」

「はい！ それでこのウエスト部分の所に入れば……」

「わあ……小さく畳めました！」

隼斗と同じタイミングで完成した翼。隼斗の目にも完成品を嬉しそうに見せる翼の姿は娘のように見えた。

「上手ですね翼さん！ それにこうして畳めば……」

隼斗は、自分と翼の畳み終わったシューズをキャリーバッグに収めてその状態を翼に見せる。

「……綺麗」

「旅先からの帰宅でこんなに綺麗にしなくても良いといえればいいんですが、これも実践テストで重視されるかと思いましたのでね」

「あつ……今は実践テストでした」

「あはは、そういう自分も忘れかけてました」

お互いにこの空気が心地よく感じられた為か、緊迫していた空気もいつの間にか消え去っていた。

「いけませんね。言わば今の私は試験監督という立場だと言うのに……」

「では引き続き、よろしくお願いいたします」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

「ところで残りの下着に関しては……」

「わ、私がやります！ 畳み方も習いましたので！」

流石に一枚目のことが応えているのか、はたまたようやく自分で出来るようになったから張り切っているのか、その真意は隼斗には分からなかった。

「……と、ところで女性の下着の収納に詳しいようでしたが……まさか」

「あ、いえいえ！ その……うちは早くに父を亡くして、母が独り身で仕事片手に自分を育ててくれてたんです。だから家事洗濯事は全部自分がやっていて、そこで母の下着も閉まっていたので知っていますだけですよ」

翼は踏み込みすぎたと後悔する。よく良く考えれば隼斗の家事についての知識や経験はあまりにも高すぎた。それは1年、2年じゃ届かないほどの高みで、翼自身も深い事情があることは薄々感ずいていたのだ。

「ごめんなさい」

「どうして翼さんが謝るんですか？」

「いえ、その……嫌なことを聞いてしまったと思い……」

「気にしないでください。父の顔はあんまり覚えてないですよ……物心着く前にいなくなってしまったので」

つまりそんな頃から隼斗は母の手伝いをこなそうとしていた。それがさらに翼に重くのしかかった。

「……ごめんなさい」

小さく、とても小さな声で翼は声を震わせた。

◇

隼斗の実践テストが始まってから1時間が経過していた。散乱していた翼の衣服類に関しては、始まってから30分程で全て終了して、残りの時間は全て借りた部屋の掃除に当てられていた。

「まるで最初に入った時のように綺麗になってる……」

「制限時間までには何とか間に合いましたね」

隼斗はこの後に部屋の清掃を行う作業員が楽になるようにと、ベッドのシーツや枕カバー、使用されたタオル類諸々を全て1箇所¹に纏めていた。

風呂場を掃除し始めた際には、そこまでやるのかと翼に言わせたほどの隼斗だった。

終了のアラームが鳴ると同時に、ドアがノックされた。

「時間通りの到着です、緒川さん」

「翼さんも試験監督²ご苦労様です」

やってきたのは緒川だった。彼は入ってきてすぐさまその異変に気がついた。

「これは凄いですね……」

「お眼鏡にかなって何よりです」

辺りを見回す緒川。予想以上の出来に驚きを隠せていなかった。

その傍ら、ずっと過程を見ていた翼はというと、自分のことのように鼻を高くしていた。

「では細かく採点していきますね」

「よろしくお願いします！」

それから緒川による点検が行われた。大まかにテーブルの上や、

ベッド付近、クローゼットの中から玄関まで見ていく。

「どこも完璧ですね。言うこと無しですよ」

「っしー」

小さくガッツポーズする隼斗。そんな年不相応な仕草を見た翼は、思わず笑みを浮かべる。

「あつ、緒川さん！ お風呂場も見てください」

「お風呂場ですか？ もしかして……」

「はい、一応」

風呂場を覗くと、水滴は愚か、髪の毛一つ余すことなく落ちてない状態だった。

「徹底してますね」

「ホテルなのでそこまでやる必要は無いんですが、実践テストという事は翼さんの家を想定したテストだと思ったので隅々までやらせて頂きました」

「なるほど」

深く頷く緒川。その内心では緒川の真意を当てていた隼斗に感心していた。

（見事に当てられてしまいました。掃除に関しては文句無しですね）

「次はバッグの中身を確認します。翼さん、少し失礼します」

「あ、はい。どうぞ」

それからそれから……。

緒川の採点は終了し——

「結果発表」

隼斗の命運を決める瞬間がやってきた。

「……と言っても、文句無しの合格ですけどね」

「ほんとですか!」

「ここまでの成果を見せられて不合格なんて言えませんか」

緒川は苦笑し、隼斗はようやく肩の荷が少し降りた気がした。傍にいた翼もまた、自分の事のように喜びを噛み締めていた。

そんな翼の変化に緒川はすぐに気がつく。

「翼さんも嬉しそうですね」

「——え、あ……その、思わず」

自分でも無意識だったため、指摘されてようやく気がついた様子の翼だった。

「このまま行けばいいパートナーになってくれそうですね」

「……?」

「いえ、こちらの話です。ともかく、高波さんの実践テストは合格です!」

「ありがとうございます!! ……でも、実践テスト”は”って事はまだ待っているって事ですよね?」

「そうなんですか?」

翼の問いかけに緒川は首を横に振る。

「高波さんを採用する事は無事決まりましたよ」

「で、では—」

「しかし、高波さんは最近までは普通の一般人でした。そんな彼が多忙な翼さんと共に行動するためには体力が必要になります」

「あ……」

風鳴翼の活動範囲はもはや日本に留まらず、世界各地にまで伸びている。そうなればお世話係は自ずと着いていくことになってしまう。泊まりとなればその場でお世話係を全うし、日帰りが出来るのなら自宅で……というように毎日が忙しくなる。

「ですので、高波さんにはこれからお世話係を全うするための体力作りをしてもらいます」

「えと……それ自体は構わないんですが、それは筋トレとか、ジムに通

うとかそういう事ですか？」

「確かにそういった事も行いますが、僕にうってつけのトレーナーの心当たりがあるのでその方の元で修行してきてください！」

「しゅ……修行……？」

「——まさか、緒川さん……」

無言で笑みを浮かべる緒川。その真意が読めぬまま、その日は解散となった。

しかし、隼斗はこうして風鳴翼のお世話係という役職に就くことが出来たのだった。

◇

「……というわけで、明日から修行に行ってきます」

「ねえ、隼斗……少し頭冷やそうか？」

自宅に帰ってきた隼斗は、早上がりで家に帰っていた母に仕事が決まったと報告をしていた。

「え、いや……だから修行に……」

「仕事が決まったって話じゃなかったの!？」

「うん、仕事決まったよ」

「それで？」

「修行に出ってきます」

「……息子がいつの間にか日本語を忘れてしまったわ」

ダイニングテーブルに項垂れる母

——たかなみの高波菜乃。

女手一つで育てたはずの出来た息子が、いつの間にかアホの子になってしまったのではないかと冷や汗が止まらないでいた。

「と、とりあえず……仕事先は決まったのね？」

「うん。かなりの良待遇だし、仕事内容も簡単すぎて貰いすぎなんじゃないかって恐縮するくらいにはお給料もいいよ」

「……それだけ聞くとアブナイ系のお仕事なんじゃないかって心配に

なるんだけど……」

「そのうち緒川さん——翼さんのマネージャーさんから挨拶に来るって言ってたから大丈夫だよ」

少し厄介な案件を終わらせてから伺う、そう隼斗に伝言を託した緒川。その厄介な案件というのとマネージャーの仕事にどう直結するのか頭を悩ませた隼斗だったが、人の影を縫い付けるとか訳の分からない技を見せられた以上、なんでもありなのだと思うようになった。

「それにしてもあの風鳴翼ちゃんのお世話係……ね。よく合格出来たわね」

ま、うちの隼斗なら余裕だけど！ と親バカを炸裂させる菜乃。その鼻は高くなっていた。

「あー、面接官の前で去勢しようとしたからかな」
菜乃は高くした鼻を折りかけた。

◇

「……(こ)か」

あれから数日、隼斗は緒川に渡されたメモの通りの場所にやっていた。
外装からして道場のような雰囲気醸し出した門構え、そして日本の古き良き庭園が見え心が澄んでいくようだった。

「あのー、すみませーん！ 緒川慎次さんの紹介で来ましたー！」

「——ん？ おお！ 来たか！」

中からやってきたのは大男……ではなく、隼斗にとっては見知った赤髪の男だった。

「緒川からも聞いている通り、今日からお前を鍛えることとなった——

——風鳴弦十郎だ！ よろしく頼む！」

こうして隼斗の試用——もとい修行期間が始まった。

修行と新たな旅路

隼斗が弦十郎の元で修行を初めてから2週間ほどが経ったある日の事、

「あれ、師匠……お客さんですか？」

「響君か。そうか、今日は響君もだったな」

「私も……つてことは、他にも誰か来てるんですか！」

たちばなひびき
立花響、花の女子高生で好きな物はご飯&ご飯。彼氏いない歴は年齢とイコールで、スリーサイズはもつと仲良くなったら教えてくれる。

響もまた、弦十郎の元で修行を積み自身の身体を日々鍛えていた。そしてもう一人が……、

「弦十郎さーん、お昼ご飯出来ましたよー」

「おお！ 隼斗君、悪いがもう一人分お願いできるか？」

「お客さんですか？ 少し時間を頂きますがすぐに出来ますよ！ ちよつと待つててください」

弦十郎の元で修行するもう一人の弟子——高波隼斗だ。外に出ていった弦十郎を追いかけ、来客の存在に気がつくとすぐさま台所へと戻っていった。

「あの、師匠？ 今の人は……」

「先々週から俺の元で修行する事となった高波隼斗君だ」

「えええ!？」

何かなにやら分からないといった様子の響だが、ほんの少しだけ自分と同じように修行する人がいてくれることにワクワクしていた。

流れるように響は弦十郎宅に入り、隼斗の作る料理が来るのを待っていた。

「あの、師匠……高波さんって二課——じゃなくてS・O・N・G・の事って知っているんですか？」

「その事だが、隼斗君は紛れもなく民間人であり、S・O・N・G・のことも”シンフォギア”のことも秘密だ」

S・O・N・G・とは超常災害対策の国連直轄下の組織で、シンフォギアとは特異災害——通称、ノイズと呼ばれる敵に立ち向かうための歌って殴る武器である。

その素性は秘匿情報として、決して一般人には知られてはならない。故に隼斗が来てからというもの、弦十郎は勘ぐられぬよう日々気を配っていた。

その裏腹では、隼斗が自己防衛出来るレベルまで鍛えられたら教えようと考えていた。

「そ、そうになると私って結構危なくないですか？」

「む、そうか？」

「だって、私……女子高校生ですよ！ 彼氏とか遊びとかに真剣なお年頃の私が昼間から修行なんてしてるなんて、相当怪しまれますよ！」

響によってようやく事の重大さに気がついた弦十郎。珍しく動揺していた。

「違和感がありすぎる……だとオ!？」

「師匠……気づくのが遅すぎです！」

「しかしどうしたものか……隼斗君に今日は帰ってもらう訳にも行かないしな」

「あ、なら私はしばらく来ないようにしても……」

「お二人共々お待たせしました！」

二人がああでもないこうでもない、と言い合っている間に隼斗の手作り昼飯が出来上がった。

「ん？ お二人共なにかありました？」

「えつと、あの……」

「なんでもないぞ！　ところで今日は何を作ってくれたんだ？」

「今日はですね……もう夏なので冷やし中華にしてみました」

木製のトレーで運んできた3つの皿をテーブルに置いていく隼斗。麺の上に乗せられた色鮮やかなトッピング、食欲をそそる見た目に響きは釘付けだった。

「えつと……アレルギーとか大丈夫だったかな？」

「あ、私は立花響です！　響でいいですよ！　アレルギーはへいき、へっっちゃらです！」

お互い挨拶も出来てなかったため、呼び方に困っていた隼斗。それに気がついてか名乗る響。

「響ちゃんね。よし、覚えたよ」

「えへへ」

「俺は高波隼斗です……って、もう師匠から教えて貰ってるかな？　よろしくね。呼び方はなんでもいいよ」

「じゃあ隼斗さんで！」

ふと小型犬という単語が隼斗の頭に浮かんでいた。それはおそらく目の前にいる響の動きや言動が、甘えてくる犬に見えたからである。

思わず頭を撫でてしまいそうになる隼斗だったが、出会って一時間もしない相手にいきなり軽薄すぎると手を押さえつけた。

一方、響はというときちんと名前で呼ばれたことが嬉しく、照れていた。

『バカ』とか『立花ア』とか『立花響』だったりと周りから色々な呼ばれ方をしている響だが『響ちゃん』と呼んでくれる人はあまり多くない。それも照れる原因のひとつだったりする。

「お互い挨拶も済んだことだ。では、頂くとするか！」

「頂きますっ!」

「召し上がれ」

◇

「え! じゃあ、隼斗さんが翼さんのお世話係になったんですか!」
食事中の話題は隼斗の素性についての話となっていた。

響の中で一番の疑問は、普通の一般人である隼斗がなぜ弦十郎の元で修行しているのか、それだった。

「うん、でも今はまだ試用期間……というより修行期間になるかな?

本格的なお世話係はこの修行が終わったらになるね」

「……翼さんのお世話係ってことは、身の回りって事ですよね?」

「そうだね」

「あの……お部屋……とか」

「一度、長期滞在してたホテルに案内された時は凄かったね……」

それは採用のキーとなった実践テストでのことだ。

一方、響の頭の中に浮かぶのは、ある件で入院することとなった翼のお見舞いに行った時、その時に見た荒れた病室だった。

「あれは大変ですよね……」

「でもお世話しがいがあるとも思うかな。ところで響ちゃんは翼さんとは仲がいいの? よく知ってるようだけど」

「あ、えっと……その……それは」

墓穴を掘る、とはまさにこの事だった。響と翼の繋がりには秘匿情報のS・O・N・G. とシンフォギアだ。無論それ以外にも同じ学校に通っていたなどもあるが、響はテンパってそれどころでは無くなっていた。

「響君は翼と同じ高校に通っていて、それで仲が良いんだ。な、響君」
頼むから合わせてくれ、とでも言いたげに目線で伝える弦十郎。こ

の場で最強の潜り抜け方法を使っていた。

「は、はい！ そうなんですよーあはは」

「そうだったんだ。でもそうだね、良く考えれば翼さんの叔父さんである師匠と面識があれば会って当然か」

なんとか自己解決してくれた隼斗に安堵するOTONAと響。

「ところで、響ちゃんは師匠の元で修行してるけど格闘家とか目指してるの？」

「——っ！」

キュウリが飛んだ。

「えええつと……だ、ダイエツト……なんて」

「ダイエツト？ 師匠、ダイエツトが主題の映画なんてあるんですか？」

「ん!? もちろんあるぞ！」

「でも前にアクション映画以外はあまり見ないって……」

「お、俺も人間だからな！ 他の映画だつて見るぞ？」

苦し紛れの抵抗を見せる弦十郎。響はというと器官に何かが入ってしまい、むせていた。

「なるほど……師匠の修行もなかなか幅広いんですね」

納得してくれた隼斗に再び安堵する二人。早く喋ってしまいたい気持ちが大きくなる弦十郎だった。

「さ、さて！ 各自食べ終わったら早速ランニングだ！ 夏は日が落ちるのが遅いからな、とことんやるぞ？」

「はいー！」

「はっ！」

そして数十分後、OTONAと大人と子どもの三人はがむしやらに走っていた。

弦十郎が行う修行方針はただ一つ、映画見て飯食って寝る。それだけで大人はOTONAとなり、超常とも渡り合えるという。

実際に戦場で戦う響は、未熟な戦士時代に弦十郎の見せるアクション映画を鑑賞し、少しの体力作りをしただけでみるみるうちに強くなっていた。

本来なら本日もアクション映画鑑賞の予定だったが、響の秘密などがあるためランニングという形に抑えることになった。

「響ちゃんは師匠の所に来てどのくらい経つの？」

「まだ一年経つか立たないくらいですよね、師匠」

「そうだな」

「つてことは響ちゃんの方が先輩だ」

「え、ええっ!? でも隼斗さんの方が年上ですよ!」

「響先輩って呼んだ方がいい?」

「——っ」

からかい混じりに響を呼ぶ隼斗、響は今でこそ年下二人組がいるため呼ばれ慣れているが、それでも男性から呼ばれる事はまるで無いため、笑みを隠せないでいた。

「もし嫌だったら響ちゃんのまままで……」

「あ、あの! 師匠の所にいる間だけ……でお願いしても良いですか……?」

先輩という言葉の響きに揺らされ、響はなんとかして妥協点を見出し、それに隼斗は静かに頷き返事した。

「よし! あと10キロ行くぞ!」

「おっす!」

「おー!」

こうして、隼斗の修行期間はそれから二週間続いた。

そして——、



「……緒川さん、忍びながら自宅侵入しないでください」

「見つかってましたか」

「もう緒川さんの気配は覚えましたから。ところで今日はなんのお話ですか？」

「次の翼さんのライブについてです」

翼の下着類を洗濯機に放りながら、緒川から次の翼の行き先を聞かされる隼斗。

隼斗は修行期間を無事に耐え抜き、強靱な肉体……とまでは行かないが、大人から立派なOTONAへと進化していた。

その力の片鱗は、忍んでいた緒川を察知した時点で見せている。

そして隼斗は現在、翼の自宅で家政夫業をこなしていた。

「ロンドンですか？」

「はい、翼さんの夢の第一歩として海外での初ライブです。それがロンドンで行われることとなりました」

「という事はパスポート入りますよね？ 俺まだ作ってないですよ」

ああ、その事なら。と懐に手を入れる緒川。中から取り出したのは案の定だった。

「いつもながら用意が早いですね。尊敬しますよ」

「恐縮です」

緒川からパスポートを受け取る隼斗。写真については、お世話係に応募した際に出した履歴書から使われていた。

「でも、なんだか申し訳ないです。翼さんはともかくとして自分までホテル部屋を用意してくれるなんて……」

「ん？ 隼斗さんは翼さんと同じ部屋ですよ」

緒川によつて爆弾が投下された瞬間だった。

防人は男を知り、可愛くなる

風鳴翼のお世話係は、いつどんな時であろうとその仕事を全うしなければならぬ。

例え同じ部屋に泊まったとしても、

「翼さん、上着掛けますからください」

「は、はい！　ありがとうございます」

「少し寒いですか？　室内温度上げておきましょうか」

「いえ！　お構いなく……」

ベッドが一つしか無くても、

「た、高波さん！　ベッドが……一つしかありません！」

「緒川さんだな……仕方ありません。二人で使いましょうか」

「え」

「あー、勿論自分は全身縛りますので襲われる心配は無いですから」

「う、疑ってなどいません！　だ、大丈夫です……常在戦場……常在戦場……」

背中流しでも、

「背中流しますねー」

「——っ！　た、高波さん!?!」

「大丈夫です。目隠してありますので！」

「そ、そういう問題ではありません!!」

「では、行きます」

「ひゃっ！　そ、そこ……」

シャンプーでも、

「翼さんの髪はほんとに綺麗で触り心地も良いですね」
「も、もう……好きにしてください」
「一生懸命やりますから、リラックスしてください」
「……とても手慣れていますね」
「翼さんの為ですから」
「そ、そうです……か」
「気持ちよくないですか？」
「い、いえ！むしろもっとやっていて欲しいくらいで……はっ」
「なら良かったです」

浴槽の中でも、

「あー、体に染みるう……」
「ふふっ、なんだかお年寄り臭いですよ」
「あ……ついリラックスしてしまいました」
「今のが素の高波さんだったりします？」
「——恥ずかしながら」
「恥などでは無いですよ。少なくとも、私は今のもっと高波さんを
知りたくなりましたから」
浴槽に並んで浸かる二人。隼斗は、不意に横目に見た翼の笑みに心
をギョツと掴まれた気がした。
トップアーティスト、風鳴翼の魅力の一つを実感した隼斗だった。

◇

風鳴翼は悩んでいた。その悩みの種は勿論、自分のお世話係である
高波隼斗。

隼斗の仕事っぷりに文句がある訳ではなく、むしろ関心ばかりの翼
だが、今ひとつ納得の出来ない事があった。

——女性に興味が無いのだろうか……？

その片鱗に関しては初対面の時から見え隠れはしていた。どんなに翼の下着を目にしても何かを言うわけでも、何かをする訳でも無い。黙々と他の衣服と同じく扱うのが隼斗だ。

「翼さんもう上がりますか？」

「は、はい。のぼせてしまっっては明日の練習に支障があるかもしれないので……」

「着替えは用意してあるのでそれを」

「ありがとうございます」

何から何までして貰っている。翼は、隼斗がお世話係だと言うことを忘れて、申し訳なさを感じてた。

(……どうして私はこの状況を当たり前のように感じているのだろうか)

初の海外進出、その準備として泊まったホテル。そこでまさかお世話係の男性と二人っきりの部屋に入れられ、さらにはお風呂を共にするなんて誰が想像出来ただろうか。

普通なら同部屋はまだしも、お風呂は受け付けることはありえないだろう。ましてや相手は知り合って一年にも満たない男性だ、そんな者と湯を共にしている事に翼は不思議と嫌悪感は湧かなかった。

「……私も焼きが回ったかな」

彼が大切に洗ってくれた髪をタオルで優しく包む。誰かに髪を洗ってもらったことなどしてこなかった翼の初めて、それを確かに隼斗は貰って行ったのだ。

「……って！ 私は何を考えてっ！」

ほんの一瞬、翼の頭をよぎった“愛しい”というワード。その身を剣と鍛えた時から、縁を切ったはずだったそれらが浮かび上がってくる。

「奏……」

今は亡き片翼を呼ぶが、その幻すら現れない始末。今頃、自分の困惑している様子を笑って見ているに違いない。翼は思う。

「あれ……ブラが無い」

バスルームから出た翼は、用意されていた着替えにブラが無いことに気がついた。

しかしそれは隼斗のミスでも、ましてや隼斗が盗った訳でも無い。翼が寝る際にブラをしないということを、隼斗が知っていたからこそその配慮だった。

「……なんだろう。緒川さんだけでなく高波さんにまでも私の情報が筒抜けになっているこの様……」

もはやプライベートもクソも無いとはこの事だろう。緒川に関しては、翼がアーティストデビューを果たした当初からお世話してもらっていた関係なため、それほど気にすることも無かった。

しかし、つい最近知り合いお世話係となった隼斗に一つ、また一つと自分が知られているということは翼にとって不思議な気持ちにさせるものがあった。

「——あれ、今私……」

ふと鏡に映る自分の顔を見た翼。

「……笑ってる?」

歌女でも、防人でもない——乙女な風鳴翼がそこにはあった。

◇

翼よりも遅くまで風呂に浸かっていた隼斗だが、普段は長湯するタイプではない。おそらく初の海外で自分でも気が付かずに疲労を溜

めていたのだ。

「はあああ……落ち着くなー」

翼が先にあがり、一層広くなつた湯船で体を伸ばす隼斗。お世話係になるために師匠こと、弦十郎の元で修行を行つてから間も無い海外行きだったため、ガタが来ていた。

「翼さん……満足してくれてるかな」

傍から見れば淡々と仕事をこなしているかのように見えた隼斗だったが、その内心ではいつも不安になっていた。

「正直、翼さんはもつと女の子だつて事を自覚するべきだと思うんだよ。普通、玄関付近にパンツ脱ぎ捨てますかね?!」

翼の散らかしに、思うところが無いわけでは無かつた隼斗。その口は止まることを知らない

「第一、あんなに美人で可愛い人の下着触つて平気でいられるわけ無いんだよ！ でも、仕事だし翼さんを汚す訳にはいかないから必死に抑えてるけどさ……」

去勢して何とかなるのならばしたい程、隼斗は悶々としていた。

隼斗の中では、自分の性欲よりもお世話したいという気持ちが大きく上回っているからこそ、翼の前では無の境地でいられる。が、どこかでその天秤が欲に傾けばその時がクビの合図だろう。

「……しっかし、同部屋とはやってくれたなー、緒川さん」

時折、クビにするかしないかのジャツジをする機会を緒川によって意図的に作られている気がしている隼斗。

今回もその一つだと自分では思っていた。

「お風呂だつてあんなメールさえ来なければ入らないつての……」

それは翼がバスルームへと向かつて間もなくの事、隼斗の仕事前の

携帯に緒川からメールが送られてきた。そこには、

『翼さんのお世話係として仕事はバツチリこなしてくださいね！もちろんお風呂もですからね』

”よろしくお願いします”という文面の後に、可愛い顔文字が付いたそのメールを受信した隼斗。

普通に考えれば軽蔑されるべき行為だが、何をトチ狂ったか隼斗は仕事モードになり、颯爽とバスルームに向かった。

そこからはご存知の通り、翼の背中を洗い流し、髪を洗い、共に湯船に浸かった。

「翼さんの肌……めっちゃスベスベだったな」

目隠ししながらでも的確に余計な部分に当たることなく背中を洗いきった隼斗。その間、全く手が触れない訳もなく、数十分経った今でもその感触が残っていた。

「しかも髪まで洗わせて貰えたし……髪って女性にとつては命みたいなものなのによく許してくれたよな……」

隼斗は美容師でもなければ専門学校に通った試しもない。では、なぜ翼の髪を痛めることなく洗えたのか。それは例の通り、母である菜乃の髪をよく洗っていたことから知識が身についていたのだ。

「お母さんには感謝しなくちゃな……もつと欲を言えば俺を男にしてくれなかったら最高だったのに……」

何度も何度もフラッシュバックする先程までの翼の姿。隼斗が入ってきてからは、隼斗が用意したバスタオルを巻いて入ってもらっていたが、それでスタイルが隠れる訳もなく、くつきりはつきりと見えていた。

「どうして男なんだろう……俺」

大学に入って隼斗の身に起きた変化の一つ。初めて聴いた風鳴翼の曲、初めて見た風鳴翼という女性の姿。その時に隼斗を釘付けにし

たのは歌、そして翼の完璧（隼斗目線）なスタイルだった。

同年代の女性とは比べ物にならないほどのルックスで、それが年下だと知った時に隼斗は驚愕してひっくり返った程だ。

同期の友人達にはロリコン扱いされ、母には暖かい目をされたが、隼斗はめげずに翼を推した。

「憧れで大好きな人と今じゃ同じ部屋で、しかもさっきまでお風呂入ってたんだよな……うつ、やば、収まれよ……相棒」

どんなにその身をお世話係として鍛えても、男としての性には抗えないことを実感する隼斗だった。

「……本気で去勢するか？」



それから隼斗がバスルームを出たのは数十分後のことだった。時刻的にはもうすぐ就寝間近という所まで来ていた。

「……ふう、スッキリした。つて——あれ、翼さん。先に寝ていても良かったんですよ？」

ベッドの端に腰掛け、テレビを眺めている翼の姿があった。

「あ、高波さん。その、緊張で少し寝付けなくて……高波さんはゆつくり出来ましたか？」

「はい、おかげさまで」

隼斗は言えない。

長く入っていた時間の大半が悶々として出れなかったただけなどと……、

そして翼もまた言えない。

緊張で寝付けないのは、海外での初ライブが控えているからという理由ともう一つ、これから隼斗と夜を共にするからなのだが言えるわ

けがない……、

「……」

「……」

おそらくこれが、隼斗と翼が揃った時初めて起きた無言の時であろう。

この二人の間に流れるのは、テレビの音のみだった。

「あ、あの……一つ、質問よろしいでしょうか」

翼から切り出した。

「はい、いいですよ?」

「高波さん……単刀直入に聞きますが——私はそんなに魅力的に見えないでしょうか……?」

「……ん?」

最速で最短で真っ直ぐに一直線に大胆にも疑問をぶつけた翼。予想にもない質問に頭の処理が追いつかなくなる隼斗だった。

しかしそこは隼斗、すぐさま返答を思いつく。

「自分にとっては最高の女性だと思ってますが?」

「——へっ!?!」

「翼さんはカッコよくもあるし、同時にどうしようもなく可愛い時があると思います。特に自分が何かを教えている時、傍でそれをじっくりと見ている翼さんの横顔なんて輝く一番星ですよ」

どこかタガが外れた隼斗。

翼は思わぬ反撃と止まらない賞賛の嵐に追いつけないでいた。

「あ、あの……もう——」

「初めて下着の畳み方を教えた時だって、完成した物を見せて子どものように笑っているんですから、もっと褒めて欲しいのかってくらい可愛さで溢れてましたから」

「うう——もう、いや……」

「——と、まあ。何を不安に思ったかは分かりませんが、誰にも引けを取らない美人で魅力的な人ですよ。風鳴翼という人はね」

その後、翼は照れながらも無理やり眠りにつき、後を追うように隼斗も眠ったのだった。